

【種別】

技術

【元ネタ】

原則的には量子力学を下地にしている。

三巻には、小萌先生によって判りやすい例えとして「シュレディンガーの猫」の簡約が挙げられている。

なお「シュレディンガーの猫」とは、どの段階で波束が収縮するかを問うた思考実験である。

現実世界では波束の収縮がどの段階で起こるのか不明であり、現在研究が行われている。

禁書世界においては「自分だけの現実」などの説明から、

波束の収縮を脳(の認識)によって意図的に引き起こし、超能力を発現させているようだ。

[wikipedia-量子力学](#)

[wikipedia-シュレーディンガーの猫](#)

[wikipedia-超能力](#)

【初出】

一巻

【解説】

[学園都市](#)において研究されている、物理法則を捻じ曲げて超常現象を起こす力。

[自分だけの現実\(パーソナルリアリティ\)](#)と呼ばれる「認識のズレ」によって、ミクロな世界を歪めることで、マクロな世界に超常現象を引き起こす能力である。

学園都市の『開発術』が確立されたことで人為的に習得することが可能になったが、

それ以前から「天然で能力を発現させた者」である『[原石](#)』が存在する。

また、『[原石](#)』という「才能ある人間と対等になる為の技術」として『[魔術](#)』が生み出されている。

これを行使する者は[超能力者](#)と呼ばれそうだが総称は『[能力者](#)』。

真に[超能力者](#)と呼ばれるのは7人のレベル5のみである。

量子力学の語る所によると、ミクロな世界では、

観測されていない物は確率や可能性でしか語ることができない。

「ある」「ない」ではなく、「70%存在する」といった表現しかできない。

そして観測されると「70%存在する」物は70%の確率で現れ、30%の確率で消えるのである。

禁書目録世界ではミクロな世界の「観測者」は人間の頭であり、

故に人間の頭を適切に操作し、ミクロな世界を観測させれば、ミクロな世界を歪めることができるとされている。

例えば、「常識的現象」が「99%存在」し、「超常現象」が「1%存在」する時には、

普通の人間が観測すると99%の確率で「常識的現象」が現れ、「超常現象」が現れる確率はわずか1%でしかない。

しかし、頭を操作された人間は、「1%存在」でしかないはずの超常現象を本来の確率を無視して無理やり現れさせることができるのである。

そしてミクロな世界の歪みが「バタフライ効果」のようにマクロな世界にも影響をおよぼし、マクロスケールでの超常現象、本来ありえないはずの歪んだ現象を引き起こすのである。

操作された人間の頭の中にある、「超能力を発生させる何か」を『自分だけの現実』と呼ぶ。

『自分だけの現実』には未だ不明な点も多く、例えば脳の中のどこにあるかはわかっていないし、また脳単体では超能力を発生させることはできないようである。

ともあれ「『自分だけの現実』の観測が可能」ということは「まともな現実から切り離されている状態」という一種の精神障害と同義であり、

[学園都市](#)で行われる開発術とは、投薬や電気ショックや催眠術などで人工的にそれらを誘発する技術である。

ちなみに開発には年齢制限が設けられており、下限は五歳、上限は不明だが[御坂美鈴](#)の年齢では受けられないようだ。

観測さえすればいいので予備動作は要らず、使おうと思えば即座に発動可能。

ただし、可能性がその場に全く存在しない現象は起こすことができない。

観測の力と言う性質上、知覚能力と干渉能力がセットになっていることもある。

(例：[御坂美琴](#)の電磁場操作と電磁力線可視)

それぞれの能力名および能力者は、学校側が命名した『[念動力](#)』や『[発電能力](#)』等のシンプルなもののか、

『[超電磁砲](#)』、『[一方通行](#)』のように学生自身が決めた名称で呼称されている。

なお、学園都市の「能力を制御する方法を学ぶ」という環境からか、

能力者達には「自分の能力を自分で制御できないヤツは恥ずかしい」という意識があるようだ。

超能力自体は研究の過程の副産物に過ぎず、

学園都市の真の目的は超能力の先にある[神ならぬ身にて天上の意思に辿り着くもの\(SYSTEM\)](#)

であるとされる。

そのため超能力それ自体を利用しようと言うよりは研究実験的な意味合いが強く、実際大部分の能力者は役立たず。

但し一部の上位能力者は滅茶苦茶強力であり、世界を敵に回しても勝てるとさえ言われる。

一人一能力で、どういう能力が発現するかは試してみるまでわからず、

一度習得してしまった能力は脳を移植しても変更することはできない。

応用次第で多様な現象を起こすこともできるが(例:発火能力で煙を作ったり、酸素を奪うなど)、

根本の能力が一人一個なのは変わらない。

ただし、努力によりある程度成長させることは可能で、出力に応じて[強度](#)は6段階で評価される。

どの能力の制御にも計算が必要であるため、疲労や苦痛などで集中力が乱れると精度が落ちたり使用不能になったりする。

ただし、黒い翼を展開させた[一方通行](#)の例を見るに、これは物理法則に則って発動させる場合であり、

非科学的(魔術的?)法則の様なものに基づいて使用する際には演算能力はあまり関係ない

(もしくは邪魔な)のかもしれない。

また『[原石](#)』に分類される能力者は自身の力を[全く抑えきれなかったり、詳細を把握していない状態でも行使](#)しているため、

彼らについても通常の能力者と同様の演算を行っているか不明。

因みに、学園都市内では一定のカリキュラムをこなせば誰でも能力に目覚めるはずであるらしい。

[小萌先生](#)は、それでも能力を得られない者たちこそが『SYSTEM』に辿り着く鍵と思っているようだ。

学園都市暗部では能力そのものではなく、

『その能力を用いて鍛え上げた武装を作る』といった二次利用が画策されており、

[一部の装備](#)は実戦投入可能なレベルにまで達している。

[末元物質](#)がかなり無理をしてでも生かされているのは、

『この世のものでない性質を物質に付与できる』という特異な能力による工業的な価値が高いためらしい。

レベル5の序列も戦闘力というよりは、この工業的な利用価値で決まっており、

戦闘能力の高い[ナンバーセブン](#)が第7位であることもこれに起因する。

【参考】

[能力一覧表](#)

[能力者](#)

[能力者・魔術師相関図](#)